

---

# 泣き虫悪魔の物語

mia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

泣き虫悪魔の物語

### 【Zマーク】

Z9206T

### 【作者名】

mia

### 【あらすじ】

8歳までの記憶を失ったアスラ。自分が誰なのかも知らない。そんなアスラが、10年間、牢獄の中でずっと変な夢をみていた。それが、人生で一番、楽しいことだと思ってた。別に脱獄しようなんて気は起きない。そんな、意味のない日々をテキトーに過ごしていく。そんなある日のこと、外に出れるチャンスが。少し笑えたり笑えなかつたりな話。もしお時間があれば、感想、意見をもらえると助かります。

## 真っ黒

「黒い瞳 . . . 黒い髪。噂の彼か <sup>アイツ</sup> . . . でも、まだ子供じゃないか . . . 」

「ああ . . . そうだ。でも、こいつ . . . 半端なく強い。本気で襲いかかられたら、オレはあの場で死んでいた」

今現在、勇者と呼ばれている男。

側近のラーク・ホルンは恐怖で震えた声で、若き王、エルン・ロイヤーに言った。

ラークのとなりには、氣絶したままの、ボロボロな黒髪の子供がいた。

ラークはその子供を戦場から連れて、帰つて來たのだ。

「んで、あの村は降伏したのか？」

「ああ、すぐに降伏した」

ラークは残念そうに言った。

まるで、望んでいないかのよひご。

「オレに . . . 変えることができるだろ？」「

「あのときの一の舞にならないためにも . . . オレはいつしても

前に従つていのる

「…………さうだったな…………」

そして、<sup>まかまか</sup>の子供を見て、わざと困つた素振りをラーグに見せつけ、

「…………アーラークが拾つてきた、この子は、村の登録番号に載つてない…………あ、あの村の者じゃないみたいだね」

「陛下は、どうしたいんですか?」

「…………んーと…………じゃあ、ラーグが面倒みればいいと黙つ

「<sup>い</sup>J[冗談を]

本当に嫌そうに苦笑いした。

「…………気持ち悪いな…………オレに敬語を急に使つな…………『陛下』もダメだ…………からかつてこいるのか?」

「はこはこ…………」

「じゃあ聞くけど、ラーグは、<sup>い</sup>Jの子供をどうしたい?」

「<sup>い</sup>Jの子供は、生かしておくと必ず、國の脅威になる。今すぐ処刑…………あることは、<sup>い</sup>Jの城の地下にある、光も決して、入らないあの牢獄の中に…………」

「厳しいな…………子供にも容赦ないんだな…………」

少し考えるようにして、罪悪感の残るような顔で、

「そここの子供を地下牢にいれろ . . . .

「はい」

兵士は、その子供を地下牢へ連れていった。

東大陸最大の国、アルタ帝国と南にある小さな村、ベオル村との戦争。

この戦争のときは、まだ、エルンが王ではなかつた。エルンの父にあたる人物、カイン・ロイヤーがアルタ帝国の王だつた。

アルタ帝国の兵力は五万。それに比べ、ベオル村は五百だつた。

あの南大陸最強と言われる村でもさすがにこの兵力差では勝てないだろうとアルタ帝国の誰もがそう思つていただろう。

そして、ベオル村はあっけなく、降伏した。

だが、アルタ帝国の兵力は半分に減つてしまつた。

たつた五百の兵力で。あり得ない話だつた。

アルタ帝国の生き残りの兵士の誰に聞いても、みんな同じことを言った。

「悪魔がたくさんいた――」と。

この戦争はあまりにひどいものだった。

子のエルンから見ても、やはり醜いものだった。

村の住人、女、子供も容赦なく殺されていた。

もはや、ただの殺戮だった。

本当にこの戦争は必要なことだったのだらうか。

エルンは父を止めて戦場へ出たが、そこは、赤い血とその匂いで広がっていた。

匂いを嗅ぐだけで、嘔吐しそうなところだった。

そのときの父は言った。

「殺<sup>ヤ</sup>らなければ、殺<sup>ヤ</sup>られる。」

虫一匹殺せないようなお人よしであった、父親がそう言つた。

エルンは、父を止めようとしたものの、恐怖と絶望で足が、動かなかつた。

そして、

この戦争の途中で、エルンの父、カインは暗殺され、母は逃亡した。

母はまだ行方が分からず。

でも、自分の心は自分が思つていて、冷たかつた。

なぜか、母を探そうとは、思わなかつた。

---

戦場の父はいつも父ではない。

きっと狂つてこる。狂わされていく。

止めることができなかつたのは、父がどんな誰よつも・・・・・・。

化け物に見えたから。

## 真っ黒（後書き）

初投稿です。

この小説は週1のペースで頑張つて書いていきたいと思います。  
小説でアドバイスなどしてくれると嬉しいです。  
1つ1つが短いと思いますが  
そこはご了承ください。

## 謝罪

「ステラ…！　ステラ…！…死んじゃだめだ。生き残つて、また会おうって言つてたじやないか…！」

村が燃えていて、人々が逃げ惑つ中、

黒い瞳と黒髪の少年は、短剣が腹部に刺さつてゐる意識のない彼女を抱え、泣きそうな顔で、

彼女の目を覚まさせるため、必死に彼女の名前を呼んだ。

「…」

応えは返つてこない。

彼女が死ぬ。

そつ思ひのを、血打ち消すよつて、ひたすら彼女の名前を叫ぶ。

「…」

何度もやつても同じ。

返事はない。

一番最悪なことが起るのではないかと、彼女の危機を感じている。

彼女の名前を呼ぶたびに、負の感情が徐々に大きくなつていく。

もしかして……彼女はもう……目を覚まさないのかもしれない……。

あきらめを考えたその時、

「…………ら…………あ…………アスラ…………」

今にも消えそうな力のない虚ろな声が聞こえた。

「ステラ…………」

アスラはその声に瞳を輝かせた。

「やつと、会えたね」

腹部の痛みに顔を歪ませるが、なんとかアスラに笑顔を向けようとする。

「…………そうだね…………よかつた…………。なあ、この村を出たら、オレと旅をしようよ…………世界を歩きまわるんだ」

「いいわね…………旅か…………」

「じゃあ、その前に、この傷を治さないと…………今、応急処置

を . . .

「アスラ . . . 聞いて」

アスラの言葉を遮つて、彼女は真剣な顔で、

「私、あなたにしてもらいたいことがあるの」

「なに?」

「ここから、今すぐ逃げて」

彼女はアスラよりも泣きだしそうな表情になつて、アスラの手を強く握つた。

「そんなの、だめだよ。ステラの手当をしないと . . .」

しかし、彼女は続ける。

「もうじき、身体が『餌』<sup>えさ</sup>を求め始める . . .だから . . .早くー」

「喋んないで。傷が悪化するから . . . 今、手当を . . .」

「お願い . . . 早く、そうしないと身体はあなたを殺してしまつ . . .」

「 . . . はあ！？ . . . 何を言つて . . . そんなわけないだろ。変な夢でも見てたのか . . . ？」

アスラの手を握っていた力は弱くなつていぐ。

そして、ステラは動かなくなってしまった。

それと同時に、何かを貫くような雜音おと。

それに気づいたときには遅かった。

「え・・・・！？！」

激痛が走ったのは胸のあたり。

胸のあたりを見てみた。

ああ・・・。ようやく理解わかつたした。

その光景は、あまりにひどくて。

友人である、ステラの手が、赤く紅く染まっていた。

友人である、ステラの手が、僕の胸を貫通していた。

「…………！」

悲鳴にならない悲鳴ニエをあげたが、誰も助けになんか来てくれない。

どういう状況か分からぬ。

「どうしてステラが？」

胸から血が……。さっきのステラより、ひどいんだじゃ……。

これ……いわゆる……致命傷。

血がどんどん流れ……。頭がクラクラする。

頭上から、声が聞こえた。

見上げてみると、ステラはすでに立っていて、アスラを見下ろしていた。

「『おんなを……』『めんなさ』……」

ステラはひたすら、そんなことを囁つて泣いていた。

誰に謝つているのか、よくわからなかつた。

「そんな泣くなつて……。せつかく田原めたのに……泣かな  
くとも……」

だが、彼女は泣き止まなかつた。

「……泣きたいのは」ちだよ……

雲一つない、きれいな青空に言つた。

これがオレの運命だとこいつなら、それでもいいと思った。

「許して . . . . . 」めんなさい . . . . .

そうつ言って、ステラは何かを食べ始めた。

赤い何か . . . . 。

ステラが心臓を食べ歩いて . . . . 。

ああ . . . . あれは心臓だ。オレの

そこじで、オレは死んだ。

## 不気味な住まい

外の光など決して入らない闇、

アルタ城の地下牢。

入れば3日経たずで、人の精神は狂い、

そして、6ヶ月で、公開処刑。

その牢から、脱出するのは、まず、不可能だと言われている。

つまり、入れられたら最後だと。

まあ・・・そんな牢に入る人もある意味すごい。

こうした容赦ない厳しさが、アルタ帝国を支えているのだろう。

アルタ帝国の城下町には、アルタの地下牢の恐ろしさを描いた、絵本などが売っている。

子供に、罪を犯したら、怖い思いをするといつ印象を与え、犯罪防止をしている。

「…………でも、違うんだよな……」

黒髪、黒い瞳に瘦せ形の青年、アスラは、めんびりしゃべりはじめる。

アスラは、現在、アルタ帝国の地下牢に閉じ込められ、

今年で、10年目になる。

「あ、そっか。そういうや、ソリに入って今年で10年目。つてことは、今年で18になるのか……。」

なんて、香氣なことを考える。

まるで、どうでもいいことかのよう。

普通なら、6カ月で死刑。

なのに、オレは10年も生かされている……。

本に書かれていた内容によると、

こじは、光が届かない闇の牢らしき。

でも、闇つて書つほど暗くないし……

暗闇に目が馴れたとか？

## うーん

それに、オレ、じじいで過じして一〇年田だし。

不可解なことと言えば、隣人たちぐらいかなあ . . . 。

右隣の牢からは、壁に突進していくような音と、

鼻息の荒い音がする。

それに加え、左隣の牢からは、

ぶつぶつ、泣きながら、独り言を言つている声が聞こえる。

じじいで、いろんな意味で危ないんじゃ . . . 。

それに、じわちのほうが、

本の内容よりも、はるかに不気味で怖い . . . 。

ベッドの上で、そんなことをまじまじと考えていたら、

5人の城の兵士がオレの牢の方に歩いてきた。

「えっと . . . なにか」用ですか？」

馴れなれしい口できいてみる。

一人の兵士は服の中から、命令書を出して、オレに手渡し、

「アスラ・リーア、お前は今日、旧アルタ孤児院に移つてもいい。

「 . . . . . 」

実際どうでもよかつた。

ビツセイ、孤児院といつ名田の場所で、

また、監禁せられるのだ。

ただ、場所が変わるだけ . . . . 。

そして、アスラは氣だるそうにあくびをして、地下牢を後にした。

## 不気味な住まい（後書き）

おまたせしました。

これが、この小説の本文です。

2話までは、過去の話が多かったので、

分かりづらかったと思います。

これからも、読んでくださると嬉しいです。

## 記憶と案内人

「ヒヒが、お前の監禁場所だ。」<sup>ウチ</sup>

馬車に乗せられ、旧アルタ孤児院に到着した。

馬車を降りて、辺りを見渡す。

山奥の森の中、近くには川が流れている。

小鳥がさえずついて、とても美しい自然のなかに

その孤児院が建っていた。

そこでは、楽しそうに遊んでいる子供たちの姿があった。

「あれ・・・なんかイメージと違う・・・」

そして、孤児院の中を案内される。

孤児院の中は、外と違って、うす暗く、  
孤児院というより、むしろ研究所だった。

「ヒヒって・・・本当に孤児院なんですか？」

案内人は答える。

「JJKは、研究所を改装した建物だから、まだ、中についた機械とかはもつたないから、残してあるんだ。」

「ああ……そうですか。」

「君の牢屋は、一番奥の棟にあるから。」

案内人は、少し嫌そうな顔で、その棟を差した。

その棟の中は、なんかいろんな意味ですごかった。

ひどかった。

「…………んな…………」

その棟の扉を開けた瞬間だった。

元孤児院だけあって、子供がたくさんいた。

そりゃあもつたくさん。

本当にたくさんのお供が。

たくさん。たくさん。

子供が。

死んでいた。

その棟から聞こえたのは、

苦痛で悲鳴をあげる子供の声。

友達が死んだのを見て、嘆く声。

恐怖で震える声。

。 その、生々しい光景は、何度も目にしたことがあって . . . . .  
。

しかし、それとは違つて、初めて見たような光景で。

孤児院の外では、ここで何が起つていいのか、まだ知らない子供たちは、

きっと、今も楽しく遊んでいるだらう。

ひじかめる。

「…………なんで、お前らこんなことを…………」

案内人の胸倉をつかむとしたその時、

アスラの膝が床に落ちた。

激しい頭痛とめまい。

「う…………」

アスラの頭の中で、誰かが言った。

「ねー、アスラ。…………ステラは生きてるよね？？？…………  
生きて帰つてくるよね？」

「そんなこと…………オレにだって分からぬ…………」

記憶が流れ込む。

そして、アスラは頭を抱えたまま、床に倒れ、  
気を失つた。

「思い出したかなあ . . . . アスラ . . . .」

案内人は、なつかしそうに、優しく、咳く。

それに、虚無から生まれた彼女は、嬉しそうに、

「きっと、彼はあなたを思い出すわ。」

## あの夢

「ねー、アスラ。 . . . . ステラは生きてるよね？？？？  
生きて帰つてくれるよね」

泣きながら、フィルはすがるよつに言つた。

「そんなこと . . . . オレにだつて分からぬい . . . . .

弱い奴から死んで行くのは言つまでもなかつた。

「こいつは死んでいいんだ。

「それに」

声を震わせて、

「次は、オレたちかもしれない . . . . . もつ . . . . . いやだ  
. . . . んなこと . . . . .

自分の無力をを感じる。助けてとしか言えない世界。

あの扉の向う。

一言で言つなら『赤』。

ただ、ひたすら苦痛を生み出す場所。

ただ、ひたすら悲鳴が響く。

そこの住人がオレたち。

「ねえ、もし生き残れたら . . . . .

そこで、言葉をとめ、

「なに?」

アスラが聞くと、決心するよつこ、

「アイツらに復讐しよう!」

フィルは瞳を潤ませながら言った。

「僕らの身体からだをもてあそんだ、アイツらに . . . . .

アスラは頷きはしなかった。

そのとき、研究員があの扉から出てきて、  
ここに小さな牢の力ギを開けて、

「 . . . . . 出る。フィル・フィアネ . . . . .

研究員がファイルに声をかけた。

それを聞いたアスラは、顔を蒼白にさせた。

「フイ、 フィル . . . 、 待つ . . . 」

アスラが言つのを遮つて、悲しい顔で、

「 . . . じゃあね。アスラ . . . 。 さつきのは約束だよ . . . 」

だが、アスラは何も言わなかつた。

それが別れだつた。

そして、研究員はステラが連れて行かれたところへ、  
ファイルを連れて行つた。

すぐには、扉から悲鳴こえが聞こえた。

「やめ . . . つ . . . きやああああああああああああああ

ファイルの前に連れて行かれたステラの悲鳴こえ。

それに驚いて、アスラは、牢をなんとかこじ開け、その扉を開けた。

それは、あまりに酷い光景だった。

「え……なに……これ」

思わず声を漏らす。

そこはイメージなんかとは違う。

本当の赤。<sup>ち</sup>

さつき入った、フィルが血まみれで、

フィルの瞳は輝き<sup>いき</sup>を失つていく。

アスラは悲鳴をあげようとした、

そのとき、

『呼ンダノハ、才前力？……人間』

どこからか声が聞こえた。

『早ク、契約ヲ……』

ステラはその声に恐怖した形相で、

「だ、だれ……！？？」

『我ハ、共喰イ。魔ノ一族ダ。』

もう、ほぼ輝<sup>いる</sup>きを失つている瞳のフィルを抱えて、

「フィル！－私のせいで……フィルが……。……フィルはこのまま死んじやうの？」

『ソノ人間ヲ助ケタイノカ？』

「助かるの！－？」

わらにもすがる思いだった。

『ダガ、大キナ代償が必要ダ』

「何をすればいいの！－？」

『才前ガ人間ヲ助ケルコトハ、不可能ダ。……ダガ、我ガ才前ヲ半分喰ラッテ、魔人二ナレバ、簡単ニ助ケラレル』

迷いはない。

ステラは涙をぬぐい、

力強く言った。

「……共喰い。……私を喰らつて……フィルを助けて」

アスラにはステラを止める術<sup>すべ</sup>がなかつた。

そして、彼女は魔人になつた。

## 来客

「……………」

薄暗いふかふかの上で、大きな声を叫んで、目を覚ます。

辺りを見回したが、夢は、現実にはなかつた。

「…………なんだ。」

ため息をつきながら、ベッドから起き上がりつて、

「…………ああ…………そつか、ぶつ倒れたのか」

すると、後方からまだ幼さの残る声。

「…………はい…………けつ…………うなされていましたよ…………変な夢でも見たんですか？」

「ん？」

後ろを振り向くと、そこには、

小柄でサイズの合っていない装備をしている、兵士らしくない兵士？みたいな人が突っ立っていた。

「お前…………いつから…………」

アスラはふるふる震え、顔が赤くなつていぐ。

「 . . . いつからでしょつかねえ？ . . . んへへ . . . もちろん最初から最後まで？」

その兵士は、気持ち悪い満面の笑みを見せる。

「て、てめえ . . . . .」

「んーと、確か . . . . .『ステラ！－ステラ！－』って叫んでましたね」

含み笑いをし、おもしろがりながらを見て、

「なーに、赤くなつてるんですかー。 . . . . ステラって昔の彼女の名前ですか？」

「知らねーよ」

「紹介してくださじよ。僕、けつこいつ女性の扱いつまいんですよ . . . . 僕はやっぱ金髪の女性が . . . .」

「知るか！－！」

「 . . . . といつ、[冗談は置いといて . . . . .」

「お前が勝手に、女性について語りだしたんだね！が－！－！」

だが、さつきまでのへらへらした表情は、すでにその兵士から、消えていた。

「あなたが、アスラ・リーアですか？」

「ああ。たぶん、そうだけぢ……。」

眉をひそめて、もう一度、

「本当に、アスラさん？」

「だから、もうだつて」

「わいつの、たぶんひてのは?」

「それは . . . . . の . . . . 。オレには記憶がなくて、牢に入れられている間、そう呼ばれていたから . . . . 」

「最初に誰から、アスラって呼ばれたんですか?」

「(イ)の国の中、ヘルン・ロイヤーの側近のマーク・ホルンってヤツ」

「じゃあ、あなたはアスラさんで間違いないですね」

そして、嬉しそうに、瞬きをして、

「うひー」とせ、僕のこと覚えていませんか?」

「んー」

目を細め、腕を組みながら、まじまじとその兵士を見た。

だが、思い当たるよいつな記憶がなくて、困った表情で、ひたすら思い出そうとする。

それを見た兵士は、

「…………思不出せないんだね」

悲しみが混じつた、消えそうな声で呟いた。

そして、その表情はすぐに消え、やつれのよつに無邪氣に笑つてみせて、それはむづ、気持ち悪いへりへり。

そして、何もなかつたかのよつに、懐から鍵を出して、にんまり笑い、

「これ、なーんだ?」

「…………牢の鍵。…………どうやって、とつてきたんだ?…………  
・釈放の命令がでたのか?」

「いや、実力行使で?」

その笑みはほんとに薄気味悪くて。

「…………追手が来るんじゃないのか?」

すると、その兵士は、今、気がついたのか顔を青くし、

「あ

「イツは忘れていたらいい。アホだ。

「早くしないと、お前、捕まつて死刑になるぞ」

「そ、そうだね . . . 僕は、ファイル・フィアナ。 . . . 行こう、アスラ。」

「え、オレも！？」

「もちろん。 . . . あなたを脱獄させるために来たんだから」

そして、フィルは、牢の扉を開け、アスラの否応なしに、アスラの手を掴み、逃げるよつ元にして、牢をあとにした。

逃亡

「いたゞ、ヤツを捕えろーー！」

脱獄して5分後、すぐに追手が来た。

う。 うまい具合に物陰に隠れていのだが、ここもすぐ見つかるだろ

「…………お前がもう少し、頭が良ければなあ…………」

ふと、口から文句とため息が出る。

「しょ、しょうがないじゃないですか！」

「……………」

そして再度、漏れるため息。

「その…………もしかして、僕、足手まといですか？」

瞳を潤ませて、こちらを見てくる。

だから、気持ち悪いって。お前、男だろ。

「うん . . . . 。今さら気がついたか . . . . お前、やっぱアホだな」

「少しほ、お世辞でもここから褒めてくださいよ……」

「だつて、褒められるよひなことしてないだろ」

何も言い返すことができなくなつて、ファイルは、

「 . . . . ジャあ、いい案がアスラさんには、あるんですか？」

「だいたい、お前は兵士の格好してるんだし、別にオレと一緒になつて隠れなくたつていいんじゃないのか？」

「 . . . . 確かに . . . . そうですね」

反論ナシ。ファイルは納得してしまつた。

そして、なにかを考えるような素振りをして、物陰から出た。

「待つ . . . . 」

それを言つのはもつ遅かった。

廊下に突つ立つてゐる兵士が、

兵士の装備をしたファイルを見つけ、

「やつちにアスラ・リー・アはいたか？」

ファイルはなんの戸惑いもなく、

「いや、いませんでした」

よほど、自分の演技に自信があるのでろう。

しかし、やつ上手くいくはずもなく、

「やついえば、見知らぬ顔だな……新入りか？」

「は、はい……」

「配属など、担当地域は？」

「……」

なにも答えず、うつむいた。

そんな、状況を口を開けてアスラは茫然と見ていた。

ダメだ……ありや……。

そして、当然のようにバレる。

ところが、フィルよりも、声をかけた兵士の方が顔が青くなっていた。

「貴様、まさか『めいとう命灯搖らば』か?」

ん?誰のことを言っているんだ?

「『』が答です」

そして、立場上まずことになつていても関わらず、

「アスラーアスラー、バレちゃった」

後ろに振り向いて、慌てて手を振つてくれる。

「うわあ!アホ!手を振るな!...逃げるぞ!」

そうして、やつぱりフィルはバカだということを再確認したアスラと上手くいかなかつたフィルは、

ひたすら、孤児院内を走り回つて逃げた。

そして、20分が経過

「お前、オレを脱獄させるために、来たんだよなあ?」

「ひつねー、小さな声で、

「はー・・・・・」

「それで、迷子って・・・・・その・・・・オレに恨みもあるわけ?」

「本当に、申し訳ないです・・・・・」

「これって、地味な嫌がらせかな?・・・・なんて・・えへへ・・・・」

「これは、もううひうひもない。」

迷子で、行き止まりで、スタミナ切れで、兵士に囲まれて。

「ひつねー・・・・・脱獄なんかしなければ・・・・・えっと・・・・・えひしょひつか・・・・・」

「じゃあ、一番したくなかった手を使おうと思こます・・・・・」

「え・・・・・なにすんの?・・・・・命(めい)になら一人でやつてく  
れよー?・・・・・」

「ひつねーじり、期待できない手段だねー。」

すると、フィルは別人のように声を張り上げ、一瞬にして、アスラ  
の喉(のの)に短剣を突き付けた。

「ハイジの命がどうなつてもいいのかーーー。」

「……なにせひっかちしてくれてんのー。」

「……オレが、人質か。」

そして、囲んでいた兵士たちは、たじろぎ、慌てふためいた。

「言葉の意味が分かつたら、武器を捨てろ。そして、床に頭をつける。身じろぎひとつでもしたら、皆殺しだ」

皆殺し……って……。

そして、フィルは楽しそうにこままり笑い、虚無<sup>アイツ</sup>に叫んだ。

「後は、よろしく」

## 逃亡（後書き）

誤字、脱字や、」の小説の意見があれば、  
書いてくれるとありがたいです。

「 . . . . もう一、こいつも言つてゐるの。」こんな風聞つから  
だるいよ。 . . . ふああ

背伸びとともにあぐびをしながら彼女は言つた。

彼女?

さつさまではフィル（男）だったはず . . . 。

なぜか、黒いゴシックのワンピースに、つやのある黒い長髪に黒い  
瞳。

そして、人形のような整つた顔立ち。年は同じくら。

『超』の付く美少女、あるいは美女。

女装にしたつて、気合いが入りすぎだ。

フィルの髪は茶髪。それに、瞳は透き通つた碧。<sup>みどり</sup>

つまり、まったく別人の姿といつわけだ。

「あのわ . . . フィル . . . 最終手段つて . . . その . . . セ . . .  
. . . 女装？」

恐る恐る聞いてみる。

「 . . . なんだ、フィルはまだ私のことを伝えて . . . 「 . . .

アスラはまつむいて、その言葉を遮り、申し訳なさそうに、元

「いいんだー言わなくて . . . 悪かった . . . お前にそんな趣味  
があるなんて思つて . . . 「 . . .

それを遮り、彼女？は怒つた。

「初対面から失礼なガキね！私は女よ！」

だが、話はかみ合わない。

「うん . . . 分かってる . . . オレはお前の趣味、応援するから

！」

「応援しなくていいのー . . . あのね、勘違いしないで。 . . .  
私は、フィルじゃないの」

「 . . . はいはい . . . そんな冗談は . . . 「 . . .

「私は『命灯揺らぎ』。……人間に恐れられている、あの悪魔よ」

「ファイル……？」

「分からるのは無理もないわ……今の状況を開くればいいのね？」

「……？」

えっと……ファイルが『命灯揺らぎ』で……。

『命灯揺らぎ』が悪魔で……？

「いいわ……証明してあげる」

彼女は、アスラの喉元に突き付けられた、短剣を下ろし、その短剣で自分の手首に切りつけた。

「……なにして……？」

「いいから、見てて」

アスラに構わず続ける。

手首から溢れてくる自分の血を、口に含み、  
足元にある観葉植物の植木に軽くキスをし、  
そして、唱えた。

「我が血を承りし者……我に忠誠を示せ」

植物から反応<sup>ニズム</sup>が聞こえる。

『いいだろ？　．．．忠誠を誓おう』

それは、アスラにも聞こえた。

ただ、何が起こっているのか分からず、  
茫然と見ていた。

その植物は、驚く早さで成長し、建物内であるにも関わらず、あら  
ゆるところに増殖し、

孤児院<sup>ルーム</sup>は、その植物に飲み込まれ、

ジャングルのようになってしまった。

だが、見とれている暇はなかつた。

道場はすぐそこだ

「私があの役立たずじゃないって証明できたかしら？」

『命灯搖らぎ』は自信に満ちた表情で言った。

「やめなさい」としたくなる程だ。・・・・・

しかし、その小さな子供は力を使い続けた。  
ちから

「そんなことをしたら・・・力が暴走して・・・」

「うなる」とは初めから分かっていた。

洗脳されたヤツは、仕事を抹消するまで、暴走し続ける。

そして、最後には、自分も。

追手はやつてきた。

それは、研究員に連れられた小さな子供。

研究員は言った。

「奴らを殺せ

と。

その子供は、ふらふらしながら歩き、近寄つて、

無邪気な子供らしい笑顔ではなく、

なにかが外れてしまったような、狂ったような、

嘲笑うような顔を向けた。

「殺ス殺ス殺ス」

明らかにその子供はおかしかつた。

洗脳をされているのださう。

『命灯揺らぎ』に記く。

「なあ . . . 薄気味悪いんだが . . . . あれは一体 . . . .

言いたくなさそつな顔をして、

「知りずっとここに来たの！？ . . . . の場所は、孤児院とこつ名  
田上の . . . . .」

泣きだしそうな声で言つた。

「悪魔の研究所だ」

「どうか . . . . . そういうことか . . . . . 。

「悪魔を作るための人体実験 . . . . .」

孤児院内で倒れたとき、オレはその様子を目撃したんだ。

目覚めたときは、倒れたことしか覚えていなくて、その前になにがあつたのか忘れていた。

「そうだ。奴らは、子供を国中かき集めて、その子供を使って、悪魔を生み出そうとしている」

「じゃあ、なんでオレは連れて来られた . . . . . ?」

悪魔の実験は、成人したものではなく、小さな子供を使つ。

この国での成人年齢は18。

「それは . . . . . お前が . . . . . かはつ . . . . . 」

そこで、言葉は途切れた。

「おい?どうした?」

『命灯揺らぎ』は倒れた。



## 本物・偽物

彼女は倒れた。

前触れもなく、音もなく。

一瞬にして倒れた彼女の横には、アイツがいた。

「危ないな……まだ、それを言っちゃダメだろ」

倒れた彼女に優しく声をかけ、

丁寧に、『命灯揺らぎ』を横たわらせた。

オレはコイツを知っている。

「お前……ラーク・ホルンか」

この国の王、エルン・ロイヤーの側近。

「この国から逃げ出すなんて……相変わらず、肝が据わっているな」

「そつちこや、よく居場所がわかつたね

「オレの情報網のすゝむせ、お前もよく知つてんだろ」

『命灯搖りざ』を横たわらせたあと、『じかりを見て、にやりと笑う。

「命灯搖りざ . . . . .」

アスラは、『命灯搖りざ』が握っている、短剣を持ち、構えた。

自分が今、どれだけアホなことをしているか分かつている。

そんな簡単な甘い考へで、ラークに襲いかかれば、返り討ちに合つのも分かつている。

死ぬかも。

だが、その様子を面白そうに見ながら、ラークは、腰に携帶している、小さな銃を手に持つて、構えた。

アイツが狙つたものはすべて当たる。

今度こそ、死ぬ。

本当にそう思った。

そして、耳障りな銃声。

気がつけば、オレの、構えた短剣は、宙を舞つていて、

地面上に、突き刺さるようにして、落ちた。

「……」

狙つていたのは、最初から、オレではなく、

オレが持つていた、短剣。

「おいおい……やめようぜ……お前と戦いに来たわけじゃないんだから……」

本当に、殺り合ヤい氣はないらしい。

そして、ようやく相手が口を開く。

「早く……殺り合ヤおつよ……オーライチャン……」

人体実験の被害者ヒツジが言つた。

苦笑いしながら言つた。

「ほーら、『指名だぜ、アスラ・リーア』

「つ……ラーカ、何か策は?」

「なくても、十分だ。・・・力を使わせる前に、終わらす」

ラークは、その子供のまつへ、駆け出し、水筒を開け、

足で、陣を描き、唱えた。

「水の精靈・・・雨竜。<sup>うらりゅう</sup>我に姿を、我に力を、我に願いを」

水筒から、大きな水の竜が出て、地面に響くような低い声で鳴いた。

「水筒から・・・竜って・・・なんか、かわいそう・・・」

アスラは茫然とその感想を述べた。

ラークはその雨竜に乗り、空を走った。

「さあ、早く片付けよう

その声に応えるように、雨竜は、せりて勢いをつけ、

その子供ではなく、近くで操っている研究員の方へ向かつた。

だが、研究員は余裕の笑みを見せた。

子供に何かを指示しているようだ。

アスラはそれを見て、叫んだ。

身体が、震える。何かを予知しているようだ。何かが、心に訴える。

「ダメだ！ ラーク！ …… アイツなんか企んでる…<sup>たくら</sup>」

「いのちこ…すぐケリがつべ」

研究員は、

「バカめ、忠告を無視したのが、運の尽きだつたな……殺れ<sup>ヤ</sup>」

すると、その合図に従つて、

研究員がいる周辺の、岩や石、土が、空へ浮遊し始める。

ラークは、浮遊した岩にぶつかり、雨竜が消えてしまった。

そして、その合図と共に、

倒れている『命灯揺らぎ』の身体から、緑の光が輝き始めた。

それに目を覚まし、

「なんだ……これ……力が……」

『命灯揺らぎ』とフィルの姿が、交互に変化し、2人とも、顔を歪めた。

「これは……契約が……解除……そんな……力が……」

「フィル……分離してしまつ……早く……もう一度……」

そして、人体実験された、子供は、おかしそうに嘲笑わいった。

「オニイチヤン……オネエチヤン……どうしたの?……何が苦しいの? 僕はこんなに力で満ちているのに……かわいそうだね……かわいそうだね……はははははははははははは!……!」

それをみた研究員は、瞬きもせず、

「よくやった! よくやった! 私の実験は成功した! ……お前

は本物になれたんだ！ · · · · ·『命灯揺らぎ』に！

そして、子供に問う。

「偽物はどうするんだっけ？『命灯揺らぎ』よ？」

にんまりと笑い、子供は言った。

「消ス · · · 消ス · · · 消ス · · ·

「よくできたね · · · そうだ！消すんだ！」

「オニイチヤン · · · オネエチヤン · · · 偽物 · · · サ  
ヨウナラ · · ·

『命灯揺らぎ』とファイルは、泣きじやくり、

2人から、縁の光が放出していくに連れ、姿が消えかかっていく。

アスラは、2人を抱え、焦るばかりだった。

「どうすれば · · ·

また自分は、なにもできないのか？

なにをすればいい？

なにをしたって、どうせ救えない。

今何が起こっているのか分からぬくせに。

悪魔の気持ちなんて、どうせ分からない。

このまま、見ていればいい。

「ちが、つい…」

「引っ張られる……向こうに……フィル！早く！」

「ダメだ……僕の命が持たない……いたん、契約を解除するんだ！」

「ダメよ…そんなどしたら……フィルが……死んじゃう……」

「いいんだ……もう……一度あの時死んだ身だ……  
新しい契約者が現れるのを……」

「ステラは誰のために魔人になつたと思つていいのー? あなたのためによー!」

そんな会話が続いていく中、

アスラはなぜか、走り出していた。

2人を見捨てたわけではない。

あの子供を止めるために。

「なあ、お前……そんな悪役みたいなことしてて、苦しくない?  
?」

その子供は本当に分からぬ顔で、それでいて、自信満々に、

「なにを言つてるの? オニイチヤン……僕はただ、本物になるために存在してるんだ」

「じゃあさ、お前のどこが、あの2人なの?」

「IJの力が、『命灯搖り火』である、なによりの証拠……」

草木を増殖させたり、岩石を浮遊せたりした。

「そんなこと聞いてない！お前はあいつらと、全然違つよ……お前はいったいなんなんだ？」

すると、

子供は、その言葉に怒り、震え、

「お前なんかに！何が……僕の何が分かる！」

そして、アスラの周辺の地面が割れ、

地面が、一瞬にして、塵と化する。

アスラは、なんとか逃げ切つたが、

アスラの頭上には、浮遊した大きな岩石があつて、

いつ、頭上から落ちてもおかしくない状況だった。

「もうおしまい？　・　・　オーライチヤン　・　・　口は達者だけど、弱いね　・　・　・　じゃあね　・　・　・　オーライチヤン　・　・　・」

アスラの頭上から、大きな岩石が落ちてくる。

かなりのスピードだった。

ああ　・　・　・　ダメだ　・　・　・　オレはここで死ぬのか　・　・　・。

しかし、

アスラの頭から一〇センチほどのところに、それは止まった。

子供も、それに驚いた。

「どうして　・　・　・　・」

そこには、だれもいなかった。

防いでもいなかつた。

「いつたい　・　・　・　・」

アスラは、子供の方を見た。

自分で止めたのではないかと思ったから。

しかし、それは違った。

子供は、叫んだ。

「早く！ アイツを殺せ！ 殺せ！ 殺せ！」

だが、子供が操っている巨石は、言つて聞かない。

消えかかっている、『命灯揺らぎ』とファイルは小さく力なく言った。

「あれは……力の暴走だ……」

## 本物・偽物（後書き）

次回は  
グロくなりそうな感じです。○  
n

あ、あと

暇なときは、各話の編集を行っています。

詳しく述べ、活動報告に書いたので、  
よろしくです。

## トマト

「う…………ああ…………」

子供は、地面に膝をつけ、今にも倒れそうな様子だった。  
「なんでだ……なんでだ……力が……外に出でいく……」

研究員は、

「どうした『命灯揺らぎ』????早く、奴らを…………  
『言つこと聞かない…………力が…………』

岩石は、子供の命令を無視して、空を浮遊し、

研究員の、頭上へ向かう。

「来るな————！」

研究員は、走り、なんとか逃れようとするが、所詮人間。

結局、追いつかれ、岩石はその研究員の頭上に。

「待つ…………」

だが、その言葉は遅い。

ぐしゃり と鈍い音。

あっけなく、その研究員は岩石に潰されてしまった。

あの岩石が自分の上から落ちていてもおかしくはなかつた。

あれが落ちてきたら、自分もあんなつていただらつ。

アスラは、すこし想像してしまい、吐き出しそうになる。

酷いものを見た。

「 . . . . . う . . . . う . . . .

子供の泣き声で、後ろを振り返つてみると、

研究員を潰した赤く染まつた岩石が、浮遊し、子供の方へ向かつていた。

緑色に光る謎の光は消え、ファイルと『命灯搖らぎ』は契約を解除されず元通りになり、

『命灯搖ゆき』はフィルの姿に戻った。

そしてフィルは、

「あの子は、あの力で禁忌を起こした……もつ、僕は、なにもしてあげることができない」

アスラはなんのことだか、分からぬ。

「禁忌って？」

「悪魔の魔力を使って、人を殺すことです」

「でも、あれは勝手に岩石が……」

「あれは間違いなく悪魔の魔力で動いています。それが間接的であるうと関係ありません」

子供の方へ向かった岩石は分裂して、子供の身体にまとわり付く。

重さで走り逃げられなくなり、岩石に固められてしまった。

どんなに暴れても身動きがとれない。

そして、小石は、地面にその子供を中心にして、陣を描いていく。

「あれは？」

「闇の陣です . . . . .」

その陣からは、この世に存在しないような、気配と嫌な威圧感を感じる。

そして、あつという間に陣が完成した。

子供はなにも言わない。

陣の完成とともに、聞き覚えのある声が聞こえる。

『人間ヲ殺シタ愚力者ハ、才前力・・・ナント哀レナ・・・』

「殺したのは、この子供じゃない！」

助けようなんてこれっぽっちも思つてないのに、アスラは言った。

『デハ、誰ガ?』

「誰も人を殺してなんかいない」

『嘘ヲツクナ』

「その子は、ただ他人の力を奪つて、暴走したんだ」

『デハ、奪ワレタ『命灯搖ひざ』一責任ガアルト?』

「そうじやない」

『才前ハ、何ガ言イタイ?』

「その子を解放しろ」

『フザケルナ』

何かがブツンとキレる音。

もしかして、オレの?

「ふざけて言つほど、お人よしじやない! その子供を今すぐ解放しろー。」

『貴様 . . . 何者ダ?』

「ただの脱獄者、アスラ・リーアだ」

『 . . . . . 』

「なにか文句でも?」

明らかに、喧嘩を売るよつた発言。

殺されるかも。

『……ソウカ、面白い奴だ。『命灯搖らば』、オ前ハ、知ツ  
テイタンダナ?』

ん? なに? 面白い?

『マダ、覺醒前力。惜シイナ』

そしてヤツは、

『オ前ガ、ソコマテ言ウナラ、オ前ガ合ツテイルノカモシレナイ。  
ソノ子供ヲ見逃ソウ・・・』

そして、ヤツの声は聞こえなくなった。

子供は解放され、そのまま、地面に倒れ、気を失った。

そして、オレはといふと、

「お前は、脱獄者としてオレが連れて帰る」

とラークに言われ、逃げる気力も体力もなく、あっさりラークに捕まり、

手錠をかけられ、フィルと共に、馬車に乗せられた。

## トマト（後書き）

カタカナで一番読みずらっこ話だったと思します（笑）

つていうか、書く前に気がついたんですけど、  
お気に入り登録してくれた方が3件！？

遅くなつて、すいません、ありがとうございます

「」は夢の中。

「アスラ！――アスラ！」

知ってる声が、オレを呼ぶ。

「……記憶は、今のアスラには、必要ない。必ず重荷になるから……。」

目の前のその声は、

手から不思議な光を放ち、

それを、自分の頭を撫でるよつこし、オレは光で満ちる。

そして、早くもお別れ。

「さよなら……アスラ……大切な記憶なら、思い出せるはず……」

悲しそうに、嬉しそうに彼女は言った。

「……それまで、私は記憶を背負つて、罪を償わせてもいい。」

あなた

そして、また聞こえる。

「……アスラ！」

しかし、さつきと違う男っぽい声。

そして、クラクラするのはきっと、馬車に乗っているからだらう。

「分かつたって！馬車から降りるからー！」

夢から覚め、目を開けてみる。

すると、田の前にいるさつきの声の主と推測できる男は、オレを揺わぶつ起こしていたようだ。

オレの田の前で品のある顔にこあわないくらい豪快に笑った。

「なにがおかしい！？」

あまりに笑っているから、ムカついた。

「いや……寝言が……」

状況が分からず、辺りを見回す。

すると、自分がどれだけアホか実感する。

「……馬車のなかじゃない……」

恥ずかしすぎる。

オレは、会議の場のようなところの中心にいたようだ。

そして、周りの大勢の中には、笑いを堪えて、腹を抱えている者、

テーブルを叩いているもの。その他いろいろ。

そんななか、

「陛下、アスラ・リーアも起きたことですし、議論を……」

エルンの秘書の真面目メガネの若い青年、ラガル・レントが口をはさんだ。

「ああ、そうだな」

オレの目の前で豪快に笑った男は応える。

ん?待てよ?陛下って……

「お前！エルン・ロイヤーか！－」

なんてことだ . . . アルタ帝国の若き王に . . . 起こされ、笑われたのか。

それで、なんかムカついて暴言まで吐いた。

恥ずかしくて顔が赤くなるどいつもか、

今の立場がいろいろヤバすぎで、顔が青くなる。

いや、赤と青だから紫か . . . 。

そして、ラガルは議論を促すように進めた。

「えー . . . それでは、脱獄者アスラ・リーアの件についてですが . . . 今回の処分はどう . . . 」

オレの目の前にいるアルタ帝国の若き王、エルンはラガルの言葉を遮り、

「アスラ・リーアをラーク・ホルン直属の部下にする－」

それを、言い放つと、その場の大勢がざわつき始めた。

そして、そのなかのふんわりとしたショートな金髪の気の強そつた女が声をあげた。

「ですが……陛下……アスラ・リーアは信用できません……」

いきなり反対意見。

「彼は先ほどまで、悪魔と行動を共にしていたのです……」

悪魔と言えば……ファイル……。

ビリビリといったんだろう……。

「ほーくはーーーですょーーー」

まるで、オレが考えていることが分かっているような口ぶりの陽気な声が聞こえた。

隣で、椅子と共にロープでぐるぐる巻きにされている。

だが、その顔は相変わらず一貫一貫としている。

行動を共にして、分かったことがある。

それは、コイツが果てしなくバカでしょうがないといつことだ。

完璧な楽観主義にポジティブシンキング。

マイジのことは、まあことして、

気になるのはオレの処分。

「クランの言いたい」とは分かるが、オレが言つてゐるんだ。……  
信用できなじか？」

「いえ……決してそういうわけでは…………ならば、陛下、  
私に条件があります」

「いいだろう……なんだ？その地位が不満なら、もう少し、あげてやつてもいい。」

しかし、彼女は首を振る。

「いえ、そうではありません……私と脱獄者アスラ・リーアで決闘を行います。」

「もし、アスラ・リーアが勝てば、私は彼をこの城の一員として認めましよう」

エルンも少し考え、楽しそうに頷き、

「…………む、いいだろう……決闘を許可する」

オレに勝算があると思つて居るのだらうか。

エルンは、嫌らし笑顔を作り、アスラの方に顔を向けた。

「オレの期待を裏切らないように頼むぞ」

アスラの肩をポンと叩き、

「では、これで会議を終了する。クラン・レッサとアスラ・リーアの決闘は3日後だ。 . . . 以上、解散」

会議をまとめ、

エルンは、ラガルを連れ、この場を後にした。

ラークは、ファイルを解放し、

「わざわざ、来てくれてありがとう . . . お前は、あっちの国の女王様とやらが、待っているんだろ?」

「ありがとう . . . ジャあね、アスラ、それと兄さん . . . . .

ファイルは一瞬にして消えるよって去った。

自分の国へ帰ったようだ。

兄さんって、誰のこと?

え? ラークってファイルの兄さん?

そして、ファイルを見送った後アスラは以前よりも断然いい、ベッド付きの牢へ連れて行かれた。

牢までの道のり、アスラの案内人の兵士が、不安そうな顔で尋ねてきた。

「クラン隊長と戦つそうですね . . .

「うん . . . そうだけど」

「少し小柄だからって、舐めてかかると痛い目みますよ。腕の一本くらいは覚悟しないと . . .

「そんなに強いのか?」

見た感じ、折れてしまいそうな細い腕に、太陽の光を浴びたことのないような透き通った白い肌。

まあ、いわゆる、か細い感じ。

だが、その容姿とは正反対に、今日の会議での格好は、話し合いの場であるのに、

なぜか丈夫そうな鎧を着こんでいて、腰には一本の剣を携えていた。

議会では、いつもそんな格好をしてくるのだろうか。

「はあ . . .

めんじくせー。

だが、それとは裏腹に、

その兵士は田を輝かせて、

「クワーン隊長じゃふんと言わせやつてください。」

本当に期待するような田で。

なにか、恨みでもあるのだらつか。

「 . . . . .」

ああ . . . めんじくせー。

そんな田でオレを見ないで . . .

アスラは沈黙する」としかできなかつた。





「まさか……」

私は、手加減のつもりで用いたあの特殊な剣で、ヤツを貫いた。

といつても、普通は貫けない。貫けるはずがない。

違う表現をするなら、人間には効果がない。

私が用いたのは、そういう剣。

なのに、貫いてしまった。

その出来事は証明した。

「…………姉えさん…………遅かつたじやないか…………」

私が仕事から家に帰ったときのこと。

弟の声を聞いた。

私たちの親は、ちょうど私が物心着いた頃に亡くなつた。

親が亡くなつてから、私は生きるために必死に働いた。

働くと言つても、村中の「ゴミ」を拾い、それを売つてお金に換える程度のことだ。

ごくわずかなお金で、少量の食糧を買い、ぎりぎりな生活を送つていた。

弟のクオンはそのころの私の姿を見て、僕も働きたい。とよく言つていた。

そして、いつの間にか、クオンも一緒になつて私と働いてくれていた。

だが、クオンが私と同じ仕事を始めたころ、

クオンは、原因不明の病にかかり、目を失明し、歩くことは困難で、

ついに、話すこともできなくなってしまった。

私は、一田も早く弟のために、拾つたがらくたをたくさん集め、

車いすを作つてあげた。座り心地も悪く、

がらくたで作つたため、ひどく脆さきい。

私は、ごめんね、上手く出来なかつた――。と言つたが、

クオンは、瞳も口も閉じたまま首を振り、泣いてくれた。

しかし、そんな弟がなぜか血まみれで立つていて、剣を携え、

見えない何かと会話をしていた。

「早く……消えろ……」

剣を何もないところに振り下ろし、叫んだ。

「クオン……どうしたの……一体……なにが??」

？」

私には何が起<sup>ひ</sup>じているのか、分からなかつた。

ただ、幻覚というわけではなさそつた。徐々に傷が増えしていくのだけ分かる。

見えない何かと戦つている。

混乱する私の方に振り向いて、クオンは微笑んだ。

まるで、私が見えているかのよう<sup>ひ</sup>。

「大きくなつたね……姉えさん……でも、僕の方が大きいや……」

クオンは立つていた。

「……やつと……終わつた……」

安堵の息を漏らし、剣を鞘に戻した。

しかし、剣を鞘に戻した直後、クオンは苦痛で声を漏らした。

「……かはつ……」

クオンは腹に手を当て、出血量を確認して、苦痛な顔をした。

「……もつダメか……全く……治癒が追いつかない……  
そのうち『命灯揺らぎ』も離れるか……」

なにを言つてゐるのか分からず、私はクオンの腹に手を向けた。

いつのまにかにできた傷。そして大量の血。

そして、明らかにクオンの腹には何かが刺さつてゐる。いや、貫いていふと言つた方が正しい。

貫いている何かには、クオンの血が滴しだたつてゐる。

それを見たとたん、景色は変わる。

家の中だつたはずなのに、赤く染まつた荒れ地にいた。戦場のようなどころだ。

「え……？」

そして、クオンが話してゐたと思われる声が聞こえる。

『ヨウヤク『命灯揺らぎ』ノ契約ヲ解除出来ル……ソウスレバ  
我ハ……』

どこから聞こえるのか分からぬ。直接耳に届いてゐる感じだ。

人間離れした声に、  
禍々しい威圧感。  
まがまが

ここにいるだけで、息が苦しくなる。

「姉えさん . . . これを持って . . . 」

クオンが私に渡したのは、さつき振り下ろした、長くて不気味な青い剣。

これを私に渡して何をしろと？

「戦え」と言つのかと思つたら、違つた。

「僕をそれで . . . 」

「殺せ」だ。

「え？ 何？」めん . . . もう一回 . . . 「

動搖して、もう一度聞いてしまった。

「早く……」

「僕を殺して

## 悪魔殺しの剣（前書き）

戦闘場面を忘れていたようなので、割り込み投稿させていただきました。ほんと、すいません。

## 悪魔殺しの剣

しんと静まり返る会場。

それと、感じる緊張感。

緊張のせいだらうか。

夏の気候にしては、肌寒く感じる。

身体が震える。

オレとクランはこの会場の中心で、  
静かに決闘の始まりを待っていた。

すると、奥の入り口から人影が現れた。

質素で装飾のない服に、

手入れが良くなれ、寝癖1つない、  
明るいブルーの髪の好青年。

女性なら振り向かずといられない、  
典型王子様なルックス。

この国の若き王、

エルン・ロイヤーがようやく、やつて來た。

周りから歓声があこる。

目立つのは、特に女性のメロメロな声。

羨ましいかぎりだ。

「これより、脱獄者アスラ・リーラとクラン・レッサの決闘を開始する」

その始まりの言葉と共に、周囲の歓声は、激しさを増した。

円形の会場の客席には城内の多くの兵士や関係者。一般客もいる。  
その脇やかな円の中心には、  
睨まれている男と睨んでいる女。

それは無論、オレとクラン。

クランは、あの会議のときのよつてに、  
重そうな鎧を身に纏つていた。

腰には2本の長剣。赤いのと青いの。

オレはとこうと、正々堂々といふ意味で、  
クランと同じ装備。かなり頑丈なものだ。

武器は、初心者でも扱えるような、軽い大剣。

もちろん、身を守るための盾もある。

ルールは、戦闘初心者であるオレのために、  
相手に一太刀浴せられたら、

オレの勝ち。

まあ、一太刀だけでもかなりの重傷を負うと思うが。

「それでは、始めつ……！」

### ラガルの開始の合図。

それと同時に、クランは鞘から赤い剣を抜き、勢い良く、こちらに向かつて走り出した。

それを見て、一步遅れをとり、焦りながら、オレも剣を交えるように、相手に斬りかかった。

力の差は圧倒的。

「…………っ……！」

剣を握ったのは、これで2回目。やはり、武器というものは重い。

甲高い音が響く。

一瞬で、オレの握っている大剣は<sup>ちゅう</sup>宙を舞う。

力の差は、かなり大きい。

「もう終わりか？」

つまらなそうに、それでいてなぜか愉しそうに笑う。

「……」

恐怖のあまり、声がない。

「チャンスをやる、大剣を握つて、構えろ」

クランは鞘へ赤い剣を戻す。

オレはその間に、急いで、警戒しながら、手元にない大剣を拾う。

だが、うまく構えられない。

手から冷や汗が滝のように流れ出て、

その滑剤によつて、手が滑り、構えられない。

「次は容赦しない、お前は相応しくない」

殺氣を帯びたその声は、嫌悪感丸出し。

そしてクランはめんぐくさそうに、もう一方の青い剣を鞘から出した。

不気味に輝く青い剣は震えているオレを見て、笑つてゐるようだ。

「さあ、来い」

どうにか、大剣を構えてはみたが、  
どう攻撃を仕掛けるか分からぬ。

勝算は皆無に等しい。

「来ないなら、こっちから行くぞ！」

剣は諸刃もろはであるため、  
剣同士で交わり、力で負けると、  
自分の刃やいばが自分を傷つける。

剣と剣が交わるたびに、傷ついていく。

鎧は取れ、中の服もぼろぼろ。

鎧が覆つている腕や顔の傷も増えていく。

気がつけば、立つ力もなく、地面に倒れていた。

「これで、楽にしてやる

クランは、間合いを一気に詰め、鋭い剣が襲いかかる。

胸に突き刺さる。

「…………」

クランはオレを斬るのに、躊躇<sup>ちうちょ</sup>しなかつた。

胸の激痛で、声をあげる。が、その前に、

声をあげたのは、クラン。

「…………んな……」

彼女の顔は、徐々に青白くなつてこぐ。

「そんな……貫くはず……」

考え事をしながら、ぶつぶつ独り言を言つてこぐ。

彼女の視界の片隅で、アスラは、貫かれた激痛で呻き声をあげている。

苦しい……こんなことなら死んだほうがマシだ。

彼女はなぜだか、さつきとは違つて、嬉しそうに、オレに指さして言った。

「アハ…お前…………悪魔だろ」

## 証明

「お前…………悪魔だろ」

騒がしかるべき会場には、あまり響かない、  
冷静すぎる声で言った。

さつと、彼女なりのオレへの気配りだろう。

アルタ帝国の人々は、  
悪魔という存在を嫌っている。

なぜなら、昔、悪魔によって帝国が滅びそうになつたからだ。

今では、悪魔はみな滅びたと言われている。

おとぎ話の話だが。

「…………だれが？」

その滅びたとされる悪魔が自分？

意味が分からない。

「ここの、青い剣がそう証明している」

「なに言つてんんだ！？」

「悪魔は滅びたんじゃなかつたのか！？」

「そうだ。たしかに悪魔はみんな滅びた」

「…………は？じゅあぢりして？」

「ただ、滅びたといつても、この世界にいなだけだ」

馬鹿馬鹿しくなつて、手元にある大剣を握る。

「それに……お前は自分が他の人より異常なほど傷の治りが早いと思つたことはないのか？」

「そんなこと……」

「ないよ。ヒョウおうと思つたが、それが証明できなかつた。

クラランに付けられた傷。

両刃である大剣で傷ついた傷。

全ての傷がなかつた。

「そんな…………なんだこれ？…………え？」

気持ち悪い。

さつきまで、痛みのあつた傷でさえ、  
もう塞ぎかかつてゐる。

剣で貫かれた胸の傷は、剣が突き刺さつたまま、  
徐々に塞がつていく。

わへ、血は一滴も傷口から出ない。

胸から吹き出た血は、シャボン玉のよつて、  
宙を浮いて、胸の中へ戻つていく。

「身体は、お前が言つ」と逆だが?」

冷たく嘲笑うよつて。

「こつ悪魔と契約した?」

闘いを応援する声は、両者が戦闘をやめ、話し合つて居る姿に気付いたのか、徐々に小さくなつてこそぎ、さわつき始めた。

「だから、なんの」と…?」

「とほけるな…。」

その顔は、悪魔を嫌うとこつよつは、憎悪するよつだった。

「分かつた、お前がその氣なら、私は…」

相手も、青い剣を強く握る。

あつと、その剣でオレが否定できないへりへり、切り刻むつもりだろ?」

そのつもつなら、オレだつて…。

戦闘の始まりは、オレの駆ける音。

その姿を見た観客たちは、再び勢いの良い歓声をあげる。

「う…」

クランは、本気を出してきている。

さつままでの戦いは実力の半分も出していない。

戦闘に不馴れなオレでも分かるくらい、隙がない。

「どうした？」

面白おかしそうに、剣を交える相手。クラン

「くやつ」

これじゃ、証明するどこのか、  
ずたずたに殺られる…。

ああ…もう駄目だ。

「……」

大剣を握る力を緩める。

剣を交える直後に大剣を手から離す。

死んだほうがマシだ。

外の世界は、あの牢より暗い。

ひどく、残酷だ。

その瞬間、クランは驚いた表情を見せた。

「やつと觀念したか。……死ね、消えろ、くたばれ」

罵声を浴びせる。

悪魔を嫌っているのだろう。

自分の肩に、剣が降り下ろされる。

当然の結果だ。

「…………」

クランは、目を見開く。

何があつたのだろうか。

相手は無言。痛みもない。

オレは怖くて目を閉じていた。

「……どうごうことだ！？」

オレに尋ねられても、オレだってなにが起きてるか分からない。

オレは、恐る恐る目を開き、  
斬られたと思われる肩を見てみる。

「……」

そりや、分からぬわ。

分かるのは、  
肩に向かって、何度も剣を降り下ろす目の前のクランの姿と、  
斬られているはずの肩が、斬れていないこと。

自分の知識に乏しい語彙力でうまく表現するなり、  
肩が剣を受け付けない感じとか、  
はじいている感じとかが適切な表現だろう。

「お前…、悪魔と人間、どっちだ？」

クランは、イライラしている様子だ。

オレはその問いに一言。

「ワカリマセン」



## 証明（後書き）

泣き虫悪魔の物語の過去編、  
『その悪魔の長話』を書きました。  
両立て書いて行きたいと思っています。  
よろしくお願ひします。

「いつたい…お前は…」

斬ることを諦め、その場で立ち去る。

肩には擦り傷一つ、ついていない。

普通これだけ斬られたら、腕と胴がお別れどころか、腕の原形すら留まってないかもしない。

動く気配のないクランの視線の先には、ニヤリとするアスラの姿があった。

「…そう言えば、まだ続てるんだよな?」

己の身体を貫いた大剣の柄を握る。

「何がだ?」

明らかに動搖していて、

忘れているんだろうなと思つ。

今、なんの最中か。

これが最後の賭け。チャンス

わざと不敵に笑つて見せる。

「…決闘に決まつてゐる。」

その言葉を放つた瞬間に、

アスラは柄を握つてゐる手に力を入れる。

「おおじやややややー。」

体から剣を無理矢理引き離す。

剣を突き刺したまま、治癒しようとした身体は、

剣との結合を引き剥がされ、

地にたくさんの血あかが流れ出す。

痛まないハズがない。

「……がはつ……」

かなりの苦痛を伴つ。

目の前で啞然と口を開くクランの手元に剣がなく、

「何をしているー? 塞がつた傷口かほがまた広がるぞつー。」

まるで、庇うような素振りを見せる。

先ほど殺し合いをした相手だとは思えない発言だ。

だからと言つて、コレを止めるわけにはいかない。

引き抜いた剣を引き剥がし、

すでにもう一方の剣は鞘に入ったままの、無防備な姿の彼女に襲いかかつた。

「これで終わりだーー！」

剣を抜かれたところで、1メートル程しかない距離で完全に避けることは、至難の技だろう。

切り捨てられることも予測した、捨て身の選択。

とは言つても、のしかかるだけだが。

「な……」

上手く成功。彼女の上にのしかかり、

胸元の固い鎧に、剣を突き立てる。

だが、本当に逆転できるとは思わなかつた。

彼女の実力なら、

こんな状況でも容易に、打破する事は可能だろつ。

この瞬間にだつて、オレを一瞬で殺せるハズだ。

それほど、彼女は強い。

しかし、一太刀も受けず、オレは生きている。

いろんな意味で、オレの予想は外れた。

まあ、怪我しないのは微笑ましいことだ。

「オレの勝ちだ…」

一太刀、相手に当たなければならぬから、鎧に少し傷がつく程度、剣を軽く、つついた。

すると、その鎧は粒子になり、

突き立てた青い剣の中へ吸い込む。

剣の様子がおかしいのは明らかだ。

その後、彼女を覆つっていた鎧は跡形もなく、消えてしまった。

「え…？」

アスラはふと声を漏らすが、

それに、下で尻餅をついている彼女がなぜか、焦るような顔をする。

鎧の中の身体のワインがよくわかる、動きやすそうな服。

彼女はすぐさま、露になつた、『自分の姿』を隠すよつこ。手ひみちあわせ。強いていふなら、『女の象徴』を両腕で隠すよつこ組んだ。

それと同時に、審判を行つてゐるラガルが、顔を青くする。

「……え？ オレ、なんかした？」

「触れるなっ……」の無礼者……早く剣をおひせ……。

「は……はあ……」

ゆうべりと突きつけた大剣をおひす。

だが、それだけでは終わらない。

ラガルが驚愕な顔で、驚きの声をあげる。

「え……クラン・レッサが……女……だと」

「は？ なにを今さら……」

だが、ラガルは驚きの表情で固まる。本当にラガルは知らなかつたらしい。

性別を隠していたのだろうか。

自分はすぐに分かつたが。

隠していたとなると、その行動も頷ける。

「… っく… くそーお前のせいだ！」

「あ… その… ごめん… 性別隠してるなんて…」

最上位階級の傍観者、エルンが歩み寄る。

「どうこうことだ?」これは?」

「陛下… 私は…」

エルンは一瞬険しい顔をするが、  
品の欠片も感じないような大きな声で急に笑い出した。

「ははっ… 傑作だな」

「… 陛下?」

「君の秘密は最初から知っていたよ」

「どうして… ?」

「一目見て分かったよ。それに…」

「それに?」

「面白そうだったから」

「

目の前の王子様ルックスは爽快に笑う。

「ただ…女性は、オレに仕える騎士にはなれない」

「私は…まだ…」

「分かってる。探してるんだろう？弟を」

アスラはそれを聞いて歓喜をあげる。

「え…じゃあ…！」

「ああ…特例として、我がもとで働いてもらいつ

「ほ…本当ですか？…よかつたあ…」

気が抜けたのか、彼女の顔は涙でいつぱいだった。

脱！戦闘シーン／（^○^）／

かなり時間がかかりました。

戦つ描写は難しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9206t/>

---

泣き虫悪魔の物語

2011年12月21日18時47分発行